



企業編



ニュージャパンマリン九州株式会社

安岐町下原252番地5
設立▶平成27年4月 従業員▶15名

ニュージャパンマリン九州株式会社は、三重県伊勢市のニュージャパンマリン九州

マリン株式会社の子会社として昨年4月に設立されました。ニュージャパンマリンは、旅客船や業務艇の建造に実績を持ち、大手プレジャーボートメーカーから多くの造船を受注してきました。平成26年9月に日産自動車株式会社がボート業界から撤退すると報道されると、すぐに交渉して日産マリン大分工場の跡地や生産設備を継承しました。ニュージャパンマリン九州では、親会



▲特徴となる双胴型の船体

社では行っていないが、自社ブランドのプレジャーボート生産と販売展開を目指して取り組んでいます。新会社立ち上げ時の自社ブランド8艇は、日産マリンから譲渡された国内唯一の双胴型プレジャーボートの生産型を主に利用したもので、既にボート業界で定評のある製品群でした。今年3月には、横浜で行われた国際ボートショーに3隻を出品し、国内外に大きな反響を得ることができました。根強いファンも多かったこともあり受注が順調に入り、フル稼働で生産を行っています。また、プレジャーボート以外に防衛省など官公庁向け艇体の生産も行うようになりましたが、さらに今年から2年計画で大分県の支援を受け、産官学共同研究の全く新しいプレジャーボートの開発も行っています。



▲ガラス繊維の裁断

現在、事業の拡大に伴い従業員が必要となり、積極的な新規採用に取り組んでいます。そして、生産体制を整え、独自ブランドとして新製品を提案していただける元気な会社を目指しています。



▲シリコンを塗る作業



▲型処理用にワックスを塗る作業

第一次産業編



松原 正さん 恵美さん

安岐町塩屋
平成6年から七島イ栽培に取り組む

松原正さんは、高校卒業後に千葉県の造船会社に就職し、恵美さんと知り

合い結婚しました。平成5年、転勤で大分県に戻り、実家から会社に通う生活をしてきたところ、4人目の子どもに恵まれました。時を同じくして、大分県を離れる転勤を命じられた際に、「このまま国東で子どもを育てたい」という想いから退職したそうです。その後、農業で生計を立てようと準備をしていたところ、大分県農業技術センターが杵築試験地で七島イ栽培に取り組んでいる事を知り興味を持ちました。そこで、当時栽培が盛んだった安岐町永水地区の七島イ農家を訪ね、栽培や経営の仕方を一から教わりました。最初は、1アールで栽培を始め、その後少しずつ栽培面積を増やしていきまし

た。しかし、収穫した七島イの乾燥を全て天日干で行っていたので、日照時間を計算して作業を組み立てなければならず、20アールを栽培するので手一杯の状態でした。転機になったのは、平成10年に乾燥機を導入したことでした。それからは、作付面積を40アールまで伸ばし、今では畳表を約1,300枚生産できるまでになりました。恵美さんは、「結婚した頃から、いずれは国東に戻って生活するとは思っていました。まさか七島イを栽培するようになるとは思っていませんでした。きつい時もありましたが、今まで続けて来られたのは、乾燥機から出した七島イの良い香りに感動してきたからです。これからも夫と一緒に続けていきたいです」。正さんは、「植え付けや収穫作業は、どうしても多くの人手が必要で、自分達だけでは無理な作業です。今は、七島イ栽培を始めた人達と植え付けや収穫作業などを共同で行う取り組みを進めています。いずれは、若い人達が七島イ栽培の主力となり、自分達はサポートする側になりたいと思っています」と話していました。



▲乾燥機に畳表を乾燥させている様子

行っている。いずれは、若い人達が七島イ栽培の主力となり、自分達はサポートする側になりたいと思っています」と話していました。

商工会編



宮井竹工所

国東町大恩寺
46年にわたって竹工所を営む

宮井竹工所は、創業者の宮井義信さんは、子どもの頃から手先が器用で物を作るのが大好き

きでした。手に職を持ちたかったことと、中学校の先生の薦めもあり、卒業後は別府市にある大分県竹芸・訓練支援センターに進学しました。修了後は、別府市の竹芸職人の下で5年間修業し、22歳の時に実家の納屋を改装して竹工所を開設しました。当初は、竹製のおもちゃや花カゴ、クシなどの創作活動に取り組んでいましたが、試行錯誤の末、需要の高い竹ザルを製作するようになりました。製作した竹ザルは、形やサイズを含めると50種類以上にわたり、別府の修業時代に知り合った販売業者を通じて、順調に業績を伸ばしていきました。しかし、1990年代に国内での製造コストが高騰し、業績を圧迫するようになりまし

た。この状況を打開するべく、平成4年、中国に工場を開設しました。当初は、中国で製造した製品の半分が不良品という状況で、なかなか利益も出せませんでした。しかし、根気強く現地で技術指導を行った結果、良質な製品を安定して製造できるようになりました。その後、息子の裕一さんが製品の受注・発送関係を担当し、家族ぐるみで検品する流れも出来上がり、国内唯一の竹ザル製造業者となりました。そして、さらに高まる国内の需要に対応するために、平成20年に中国に第2工場を開設しました。しかし、北京オリンピック後の中国は、人件費が高騰し、一人っ子政策の関係で若い従業員の確保が難しくなってきました。そこで、新たな海外拠点を求め、現在バンクグレイッシュで工場を建設しています。



▲中国工場での仕上げの様子

宮井竹工所は、生産の拠点は海外に移りましたが、日本で培ってきた竹工芸の技術と、竹という材質の特徴を活かした商品づくりにこだわりを持ち続け、今後ヨーロッパやアメリカにも販路を開拓していきたいと考えています。

